

# Tb1

31  
MARCH  
2005

## Distribution survey report of the Tonami city vol.1

砺波市遺跡詳細分布調査報告 1

— 鷹栖・東野尻・五鹿屋 —



2005年3月

富山県 砧波市教育委員会

## 序

砺波市は、富山県西部の砺波平野のほぼ中央部、大部分が庄川により形成された扇状地上に位置しています。将来の都市像を「庄川と散居に広がる健康フラワー都市」とし、まちづくりの基本理念を「花香り、水清く、風さわやかなまち 砧波」と定め、文化遺産である散村の保護・活用を図るとともに花・水・風をキーワードに自然との調和をもとめ、住民が安心して暮らせる住みよい都市をめざしています。

砺波市では、これまでに旧砺波市域全体を対象とした遺跡詳細分布調査は実施されておらず、平野部の大半が遺跡の希薄な地帯という印象を与えます。これまで偶発的な発見や地域的に特定種別の遺跡の表面調査はなされてきましたが、少ない情報をもとに地域の歴史的環境を語ることはできません。

また、砺波市は近年人口増加とともに開発行為が頻発しており、埋蔵文化財保護の必要性が日々強くなっています。現状のままでは埋蔵文化財行政を運営する上で弊害となりかねません。

旧庄川町では、すでに平成14年度から2カ年をかけて町内遺跡詳細分布調査が実施され、報告書が刊行されています。

そこで、国庫補助事業として7カ年計画で旧砺波市全域を対象とした遺跡詳細分布調査を実施する運びとなりました。

本分布調査の成果をまとめた本書が砺波市の地域史研究ならびに埋蔵文化財保護体制確立の一助となることを願ってやみません。

おわりに、調査の実施および報告書刊行にあたり、鷹栖・東野尻・五鹿尻地区各自治振興会および各地区土地改良区、富山県埋蔵文化財センター、富山大学考古学研究室をはじめ関係各位に多大なるご援助・ご協力をいただきました。衷心より感謝申し上げます。

平成17年3月

砺波市教育委員会  
教育長 堀田良男

## 例　言

1. 本書は、砺波市教育委員会が国庫補助を受けて 7 カ年計画で実施している市内遺跡詳細分布調査事業の 1 年目（平成 16 年度）の分布調査報告である。
2. 調査は、富山大学考古学研究室の協力を得て、砺波市教育委員会が主体となり実施した。
3. 今年度調査は、砺波市鷹柄・東野尻・五鹿屋地区を対象とした。調査期間は次のとおりである。

現地調査 平成 16 年（2004）4 月 13 日～平成 17 年 3 月 27 日

整理作業 平成 16 年（2004）10 月 1 日～平成 17 年 3 月 31 日

4. 調査事務局は、砺波市教育委員会生涯学習課に置き、学芸員野原大輔が調査事務を担当し、教育次長小幡和日出が総括した。なお、平成 16 年 11 月 1 口付けで砺波市と庄川町が合併し、新生「砺波市」が誕生したことにより、事務局は以下のとおりとなった。

〔～平成 16 年（2004）10 月 31 日：旧砺波市〕

調査事務局 砧波市教育委員会 教育次長 小幡 和日出  
生涯学習課 課長 白江 秋広  
同 係長 喜田 真二  
調査担当者 同 学芸員 野原 大輔

〔平成 16 年（2004）11 月 1 日～：新砺波市〕

調査事務局 砧波市教育委員会 教育次長 小幡 和日出  
生涯学習課 課長 清澤 康夫（係長兼務）  
調査担当者 同 学芸員 野原 大輔

5. 現地調査にあたって、鷹柄・東野尻・五鹿屋地区の各自治振興会に多大なご協力・ご理解を得た。また、基盤整備前の図面（従前図）の使用にあたって各地区土地改良区のご協力・ご指導を得た。記して謝意を申し上げる。
6. 現地調査員は、富山大学考古学研究室のご協力を得た。調査参加者は、下記のとおりである。（五十音順・敬称略）  
福沢佳典、間野 達（人文学部人文科学研究科文化構造研究専攻）  
伊賀崎拓郎、池田ひろ子、兎原雄人、久慈美咲、久保浩一郎、黒田佳恵、小林みのり、高橋彰則  
津田恵理子、坪田壮登、西谷朋子、本田久兒、牧野啓太郎、樋谷史章、村上しおり  
(以上、人文学部国際文化学科)、千田友子
7. 資料の整理、本書の編集・執筆は、調査担当者が行なった。また、遺物整理・図面作成には、横川美雪（生涯学習課）が参加した。
8. 採集遺物および記録資料は、砺波市教育委員会が保管している。
9. 現地調査および本書の作成に際して下記の諸氏・関係機関からご指導・ご協力を得た。記して謝意を表する。

黒崎 直（富山大学人文学部） 高梨清志（富山県教育委員会）

高橋浩二（富山大学人文学部） 宮山進一（財団法人富山県文化振興財団） 以上、五十音順・敬称略

## 目 次

### 序 文 例 言 目 次

<b>第 1 章 調査の沿革</b>	<b>1</b>
1 地理的環境と遺跡の分布	1
2 調査に至る経緯	4
3 分布調査の年度計画	4
4 分布調査の方法	5
<b>第 2 章 調査の成果</b>	<b>11</b>
1 平成16年度調査区の概要	11
2 採集遺物	18
3 遺跡各説	21
荒高屋遺跡	
五郎丸遺跡	
鹿島遺跡	
野村島宮島遺跡遺跡	
野村島西島遺跡	
桑野神社遺跡	
鷹栖四谷遺跡	
小倉の上居跡	
不動島遺跡	
鷹栖宮木遺跡	
小倉殿館跡	
鷹栖黒河遺跡	
鷹栖神吾遺跡	
<b>第 3 章まとめ</b>	<b>27</b>

## 表 目 次

- Tab.1 遺跡数の推移
- Tab.2 分布調査計画
- Tab.3 採集遺物一覧（1）
- Tab.4 採集遺物一覧（2）
- Tab.5 調査遺跡一覧

## 図 版 目 次

- Fig.1 砥波平野の地形分類図
- Fig.2 地形分類と埋蔵文化財包蔵地の位置
- Fig.3 積状耳飾
- Fig.4 踏査経路模式図
- Fig.5 調査区の字界・字名図
- Fig.6 調査区周辺の旧版地図
- Fig.7 従前平面図（五鹿屋）と遺跡の位置
- Fig.8 従前平面図（鷹栖）と遺跡の位置
- Fig.9 従前平面図（野村島）と遺跡の位置
- Fig.10 採集遺物の時期別点数
- Fig.11 遺物実測図

## 写 真 図 版 目 次

- PL.1 空中写真（1）
- PL.2 空中写真（2）
- PL.3 調査写真（1）
- PL.4 調査写真（2）
- PL.4 遺物写真（1）
- PL.4 遺物写真（2）
- PL.4 遺物写真（3）

# 第1章 調査の沿革

## 1 地理的環境と遺跡の分布

**庄川扇状地** 研波市は大部分が東部を北流する庄川により形成された扇状地であり、東に旧扇状地右扇の芹谷野段丘、そして射水丘陵から連なる東別所新山山地を控える。庄川扇状地は県内の三大扇状地に数えられ、そのなかでも最大の規模を誇り、面積は 146 km<sup>2</sup> に及ぶ。庄川扇状地には、地理学上著名な散村 (Dispersed Settlement) が広がっており、長閑な田園空間を形成している。

庄川はかつて幾度となく河川変遷を繰り返し、近世に至り現河道に落ちていた経緯がある。天正 13 年 (1585) の大地震によって、庄川町雄神橋付近の弁財天社辺りで千保川・中田川に分流された。現在の庄川が主流になるのは、近世初頭の承応年間 (1652 ~ 1655) 頃の柳瀬普請、続く寛文 10 年 (1670) にはじまる上流の松川除砂堤工事を経てのことである。

氾濫原であった平野部は、旧河道が幾条もあり、地形の小起伏が多い。そのため遺跡の希薄な地帯として知られ、遺跡全体の 30% に過ぎない。縄文遺跡の分布は、扇頂部に中期中葉の拠点集落・松原遺跡があるが、段丘裾の東保石坂遺跡、徳万遺跡、扇央部の久泉遺跡などが散在する状況である。

弥生・古墳時代は社会基盤が稻作に移行し、生活圏が湧水帯に移動したため、集落は未発見である。わずかに平野東部の低位段丘上にある安川野武士 A 遺跡で弥生土器が採集されている。

**東大寺領莊園** 奈良時代になると 8 世紀中頃に東大寺領莊園が成立し、平野東部を中心に扇央部まで遺跡の分布域が拡大する。莊園本拠に近い久泉遺跡、秋元窪田島遺跡、徳万頼成遺跡、扇央部には小杉遺跡、千代遺跡、高道向島遺跡、宮村遺跡などが展開し、いずれの遺跡も地理学上でいう“マッド” (mud) 上に存在する。マッドは微高地・自然堤防上に発達した黒色有機質上の堆積域であり、河川氾濫の影響の少ない比較的安定した地形といえる。

**般若野莊** 中世になると東大寺領莊園の範囲を踏襲して徳大寺家領般若野莊が成立 (12 世紀中頃か) し、扇央部には油田条 (村) が文献にみえる。般若野莊では領家の支配領域と目される位置に東保遺跡 (東保高池遺跡)、東保般若堂遺跡があり、周辺に秋元窪田島遺跡、久泉遺跡などがある。

**芹谷野段丘** 庄川の右岸には台地がひろがり、河川作用によって形成された河成 (河岸) 段丘が存在している。それらは低位段丘、中位段丘、高位段丘として分類することができる。庄川町庄から宮森までには低位段丘が存在しており、隆起扇状



Fig.1 研波平野の地形分類図 (神島利夫 1982)

地堆積物が形成されている。高位段丘にあたる芹谷野段丘（福岡段丘）は、旧扇状地の右扇の一部が残存し段丘となったものである。南は安川付近から北は大門町串山付近まで約10kmに広がり、福岡の厳照寺周辺では海拔80mを測る。芹谷野段丘上は、近世に庄川から芹谷野用水が引かれ、集落が展開した。

**嚴照寺遺跡** 段丘縁辺部から丘陵裾にかけて縄文期の遺跡が多く、嚴照寺遺跡、高沢島Ⅰ遺跡、高沢島Ⅱ遺跡、宮森新北島Ⅰ遺跡、上和田遺跡などが存在する。嚴照寺遺跡は梅檜野築塁場整備事業に先立ち昭和50・51年に富山県によって調査が実施されている。竪穴住居跡11棟、埋藏1箇所、穴などが検出され、中期前葉の典型的な弧状集落であることが判明した。出土土器群は、「嚴照寺Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式」として中期前葉の地域的な編年を確立した。

弥生時代は増山城跡で土器片が発見されており、古墳時代は高沢島Ⅲ遺跡で遺物包含層中から土師器を数点検出している。

**梅檜野窯群** 奈良時代になると東大寺領荘園に近接することから、須恵器の大生産地となる。段丘・丘陵一帯にある須恵器窯を総じて梅檜野窯跡群と呼び、南北約2.0kmの範囲に窯が点在し、南の福山支群・北の増山支群に分けられる。増山支群の宮森窯と福山支群の安川天皇窯が最も古く8世紀第2四半期から中葉に位置付けられ、8世紀第3四半期から第4四半期にかけて増山支群の増山危田窯、増山団子地窯、増山妙覺寺坂窯が操業を始め、同時期には福山支群で福山窯、福山小堤窯、福山大堤窯が操業している。9世紀前半に入ると、小丸山1号窯・2号窯が操業され、9世紀後半から10世紀にかけて正権寺後鳥窯、増山外貝喰山窯、増山箕山窯、東竹鎌野窯が操業をし、以後梅檜野窯跡群では須恵器生産が衰退する。

**東別所** 芹谷野段丘の東、和田川の両岸には中位段丘が形成されており、和山川流域段丘帯をなして新山山地いる。和田川は、牛岳の北西側山中に源を発し、庄東山地と芹谷野段丘の間を大きく蛇行し、池原付近で坪野川が合流する。流路延長23.5km、庄川の支流である。昭和43年、和田川総合開発事業により和田川ダムが竣工、和田川は堰止められて増山湖ができる。

和田川の右岸は、一般に庄東山地・音川山地と呼称される範囲に含むことができ、南山脈を東西に分断する射水丘陵帶の一枝群を成している。この山地は起伏量が少ない丘陵性小起伏山地であり、地質的には青井谷シルト質泥岩層の範囲に含まれる。南に位置する東別所新山山地は標高200m余りを最高点として100m余りの小起伏山地で構成されている。この山地の西北に位置する天狗山（標高192m）の北斜面、県民公園頬成の森の緩斜面丘陵は、南側山地からのかつての扇状地性堆積層で構成されている。表層地質としては、砂岩を主体とする下部と無層理青灰色泥岩を主体とする上部から成っている。

**増山城跡** 和田川右岸の丘陵上には、越中三大山城のひとつに数えられる増山城跡がある。南北朝時代の二宮円阿軍忠状に「和田城」という城名がみえ、亀山城に比定する見方がある。室町時代から放生津城を本拠とする神保氏の支城となり、天正4年（1576）に上杉謙信に攻略され落城し、天正9年（1581）に織田方に焼き払われた。天正11年（1583）以降、越中統一を果した佐々成政の西の拠点となり、のちに前田方の手に渡り、城の守将となった中川光重が退老もしくは没した慶長年間まで存続したとされる。また、左岸には城下にあたる増山遺跡が広がっている。

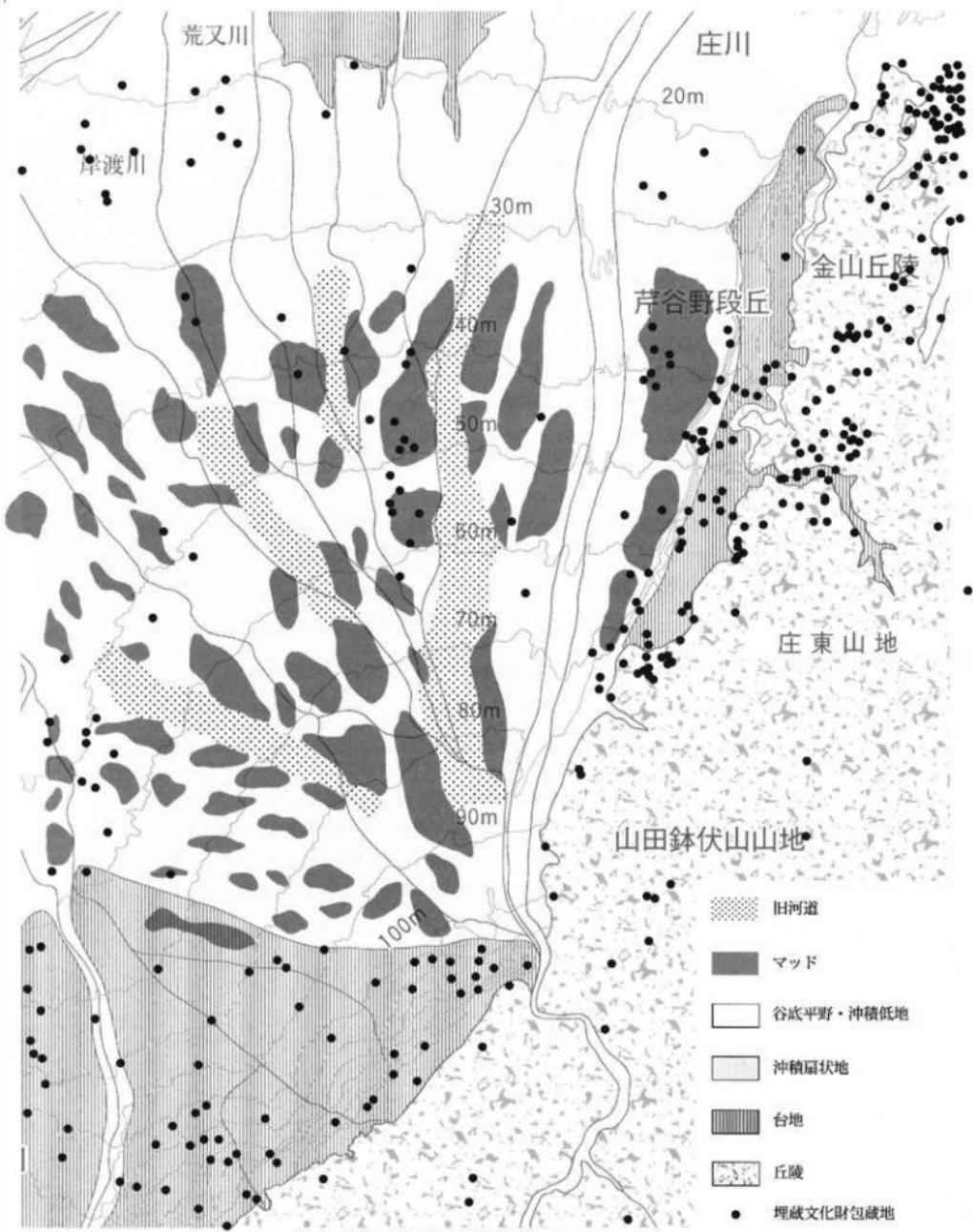


Fig.2 埋蔵文化財包蔵地と地形分類図 (Scale=1 / 75,000)

## 2 調査に至る経緯

沿革 遺跡地図は、埋蔵文化財の保護・周知化を目的として、これまで作成されてきた。砺波市内の遺跡は、1974年発行の『全国遺跡地図 富山県』ではわずか34遺跡しか確認されていないが、1993年に富山県埋蔵文化財センター発行の『富山県埋蔵文化財包蔵地図』では112遺跡に急増している。昭和40年代からの高度経済成長に伴う開発增加、そして全国的な埋蔵文化財保護の気運高揚に起因する。その後『富山県埋蔵文化財包蔵地図』を基に加除修正を行っており、現在まで159遺跡を確認している。インターネットを核とする情報化社会への移行に伴い、富山県では平成16年度に「富山県GISサイト」(<http://wwwgis.pref.toyama.jp>)を開設し、最新の埋蔵文化財包蔵地図を広く県民へ周知すべく環境を整えた。

これまでIH砺波市では、旧市内全域を対象とした遺跡詳細分布調査が行われておらず、土木工事による偶発的な発見や市民からの届出、国道敷設等の大規模事業に伴う分布調査等により埋蔵文化財包蔵地の把握に努めてきた。このようにして設定された範囲は決して精度の高いものとは言えず、開発照会がある度に事業用地を踏査してきた。開発行為等の事前協議を進める上で精度の高い遺跡地図は必要不可欠であり、埋蔵文化財の保護・活用の観点からも遺跡地図の充実は急務である。また遺跡の分布状況は、考古学研究の基礎資料である。以上の事由から、遺跡詳細分布調査を実施する運びとなった。

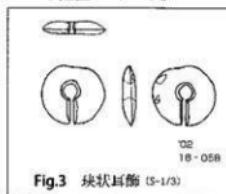
Tab.1 遺跡数の推移

遺跡数			発行機関	発行年	図名
砺波市	旧砺波市	旧庄川町			
30	24	6	文化財保護委員会	1965	『全国遺跡地図(富山県)』
35	29	6	富山県教育委員会	1972	『富山県遺跡地図』
34	29	5	文化庁文化財保護部	1974	『全国遺跡地図(富山県)』
112	98	14	富山県埋蔵文化財センター	1993	『富山県埋蔵文化財包蔵地図』
159	129	30	※平成16年4月1日現在		

**旧庄川町の分布調査** 旧庄川町では国庫補助を受け、合併前の平成14～16年度の3カ年で町内遺跡詳細分布調査を実施している<sup>1</sup>（現地調査2年、報告書1年）。町内を4地域に分割し、開発が予想される平野部に重点を置き調査が行われ、13遺跡の新規発見と2遺跡の台帳内容変更がなされた。採集遺物は463点を数え、約半数が庄川左岸の段丘上に分布することを把握している。

著名な金屋ポンポン野遺跡付近で縄文時代前期後葉・蛇ヶ森  
II式期の玦状耳飾（蛇紋岩製）を1点採集している。

1 庄川町教育委員会 2004 『富山県庄川町埋蔵文化財分布調査報告』



## 3 分布調査の計画

IH庄川町域を除く市内全域（96.33km<sup>2</sup>）を対象として、現地踏査を7カ年計画で実施する予定である（右表参照）。IH砺波市には、計17地区あり、踏査可能面積を考慮し各年度2～3地区ごとに調査を実施することにした。調査地区的設定は、開発行為が多く、埋蔵文化財包蔵地が希薄な地区を先行し、旧砺波市域の南西から北西部、中央部を縦断し庄川を越えて東部、段丘上・山間部という計画を策定した。

Tab.2 分布調査の年次計画

調査年度	年次	調査地区	面積 (km <sup>2</sup> )
平成 16 年度 (2004)	1 年次	鷺栖、東野尻、五鹿屋	14.43
平成 17 年度 (2005)	2 年次	出町、岩林	9.26
平成 18 年度 (2006)	3 年次	林、高波	10.88
平成 19 年度 (2007)	4 年次	庄下、油田、南般若	11.08
平成 20 年度 (2008)	5 年次	柳瀬、太田、中野	13.22
平成 21 年度 (2009)	6 年次	般若、東般若	13.53
平成 22 年度 (2010)	7 年次	梅植野、梅植山	23.91
			96.33

## 4 分布調査の方法

**踏査の方法** 考古学的調査として、地表面の踏査を行い遺物採集に努め、遺構・遺物の広がりや分布状況を把握する手がかりとした。砺波市の平野部は大部分が庄川扇状地によって形成され、大小河川の氾濫が現在の地形状況を生んでおり、古代以前の遺跡立地に大きく反映するという特性がある。遺跡分布と地形状況は表裏一体の関係にあるといつても過言ではない。しかし、旧砺波市では昭和 30 年代後半から県内に先駆けて大規模な圃場整備が行われており、本年度調査区もすでに整備完工されている。かつての景観は失われ、本来の地形的微起伏を確認することはできない。同時に多くの遺跡も保存されることなく破壊された可能性が高い。

そこで、近年の地形変更とこれまでの踏査経験から、遺物の表面採集自体が困難と予想されるため、「なるべく多くの日で多くの遺物を採集すること」と調査の迅速化を目的として、富山大学考古学研究室の院生・学生の協力を得て、下の模式図のように踏査経路をとることにした。扇状地上の圃場整備後の水田は、大型機械導入のため 1 区画 30 a (短辺 30 ~ 40 m × 長辺 100m) の規格を持ち、水廻り効率から短辺が磁北 (流路方向) もしくは南東→北西に設定されている。1 班 5 名の体制で 1 区画の踏査にあたり、横並びに短辺方向に沿って歩くことを基本とした。水田畦畔には積年の耕作の結果、遺物が集中する可能性が高いことから、各調査員はできる限り畦畔を踏査経路に組み入れることに努めた。

**遺物の扱い** 採集遺物は番号を振り、洗浄・注記・接合・実測作業を行った。注記表現は、「砺波市分布調査 1 年次 (Tonamishi-Bunputyosa 1)」から、「TB-1」とした。現地踏査では、携帯が簡便なゼンリン住宅地図 2000 (株式会社ゼンリン北陸) にその場でプロットし、踏査後に砺波市都市計画図 (1/2500) に写した。遺物は、班ごとに番号を振り、全体の踏査完了後、すべての遺物に通し番号を付した。大半の遺物が細片であるため、実測可能な個体を選別して図化している。

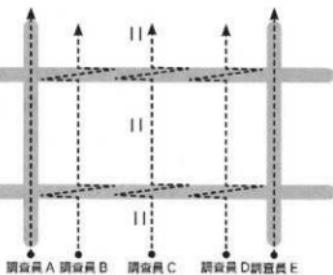


Fig.4 踏査経路模式図

**包 藏 地 の 認 定** 埋蔵文化財包蔵地の認定には、考古学的調査成果に限らず歴史地理学的・自然地理学的資料等の諸要素を考慮する必要がある。

平成 10 年 6 月に報告された「埋蔵文化財の把握から開発事業の発掘調査に至るまでの取り扱いについて」の中で法律上の保護対象となる「周知の埋蔵文化財包蔵地」は試掘・確認調査その他の発掘調査等の成果に基づき高い精度で把握・決定されるとされており、その方法として、遺物の散布状況や地形の観察、地形・地質の形成過程を踏まえ、各時代の生活・生業に適した立地の想定、地形図・空中写真・地籍図・絵図等の資料等の総合的な活用が挙げられている。

実際に岐阜県大垣市教育委員会では、平成元年から平成 8 年度までに実施された分布調査において、踏査を主とする考古学的調査だけでなく、「時代ごとの地形復元図を作成する自然地理学的調査・絵図や地籍図（字絵図）から地表面下の痕跡を推定する歴史地理学的調査、そして低地での発掘ではまず最初に出会う掘潰れ等の輪中景観を復元する人文地理学的調査」といった地理学的手法を援用し、遺跡推定の検討材料としている。市域の大半が扇状地であり、「冲積地での踏査の困難さ」を指摘される点など、当市と非常に素地は似ている。大垣市教育委員会の分布調査手法は理想形とも言うべき取り組み方であるが、諸般の事情から当市で同じ手法を採用することは難しい。少しでも理想に近づけるため、当市では以下の手法を探り、埋没遺跡の範囲決定の手がかりとした。

- 1) 考古学的調査（踏査）
- 2) 歴史地理学的調査（旧字界・字名図作成）
- 3) 自然地理学的調査（従前図判読、地形分類調査）

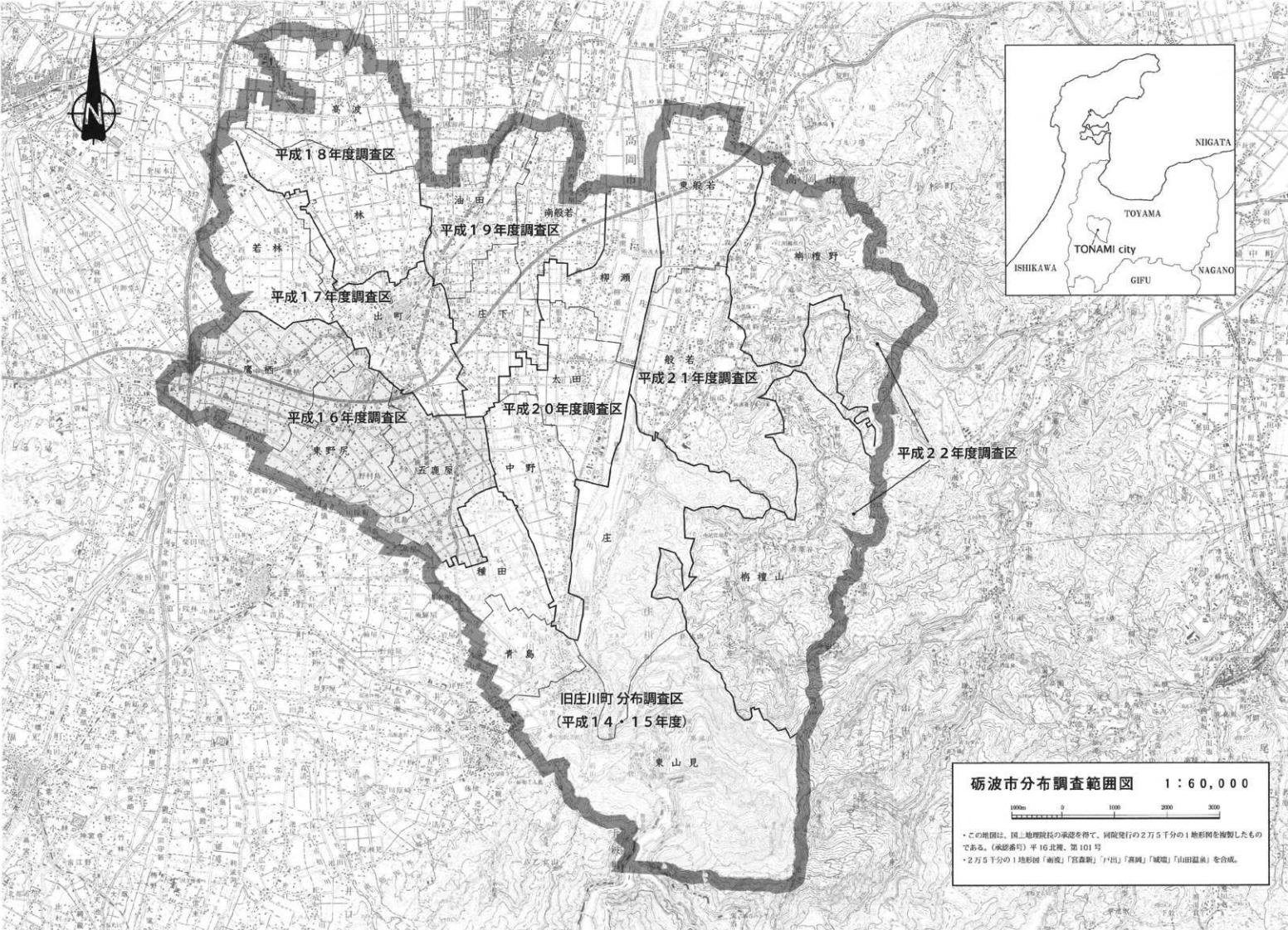
考古学的調査の方法は、先述のとおりである。旧字名・字界図は、主に砺波郷土資料館蔵の字絵図や『砺波市史 資料編 5 集落』<sup>1</sup>から字名・字界を抽出し、旧地形図（昭和 30 年代砺波市作図）・現況地形図（平成 5 年砺波市作図）に情報を入力、必要に応じ識者から聞き取り調査を行った。

また、自然地理学的調査では、土地改良区に保管されている圃場整備前の従前図を収集し、失われた地形状況の復元を試みた。現況での地形確認が難しいため、旧地形を把握するには従前図を活用することが有効である。圃場整備前の空中写真から旧地形図・等高線図を作成することは技術的に可能であるが、費用的問題から断念した。従前図は、公図を基に作られているものや現地測量が行われているものなど精度にばらつきはあるが、基本的に縮尺が 1/500 もしくは 1/1000 であるため、空中写真よりはるかに現況図との整合が容易である。ただし、圃場整備が行われた全地区に従前図が作成・保管されていない難点もある。

地形分類調査は、「土地分類基本調査 城端」（富山県 1981）をはじめとする地形分類図・表層地質図に拠っている。また、マッドと呼ばれる黒土層について、外山秀一氏の論文「プラント・オパールからみた砺波平野の土地利用と黒土層の特性」<sup>2</sup>を参考としている。

1 砧波市史編纂委員会 1996 『砺波市史 資料編 5 集落』

2 外山秀一 1997 「プラント・オパールからみた砺波平野の土地利用と黒土層の特性」『砺波散村地域研究所研究紀要第 13 号』砺波市立砺波散村地域研究所



この地図は、国土地理院の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。(承認番号)平16北緯 第101号  
・2万5千分の1地形図「南越」「官森新」「出山」「高岡」「城端」「山田温泉」を合成。



Fig.5 調査区の字界・字名図

## 第2章 調査の成果

### 1 平成16年度調査区の概要

**鷹栖** 庄川扇状地の扇尖部にあり、典型的な散村となっている。津沢往来に交差して宮川が村の中央を縱断するように南東から北西方向に流れている。西城は、旧野尻川の氾濫原であり、中世末から近世初頭に急速に開拓されたところである。鷹栖村の草高は、江戸時代中頃の享保12年（1727）に3,654石092との記録があり、加賀藩下第一の大村となるが、その主要部分はこの西城であった。

上島・焼馬・黒河・宮木などについて『鷹栖村史』は以下のような開発伝承を掲載されている。

「越中三郡古跡跡」に「鷹栖館跡」・「小倉殿跡」とい、俗に「庄官屋敷」と称するところは、かつて土屋をめぐらせた館跡で小倉六右衛門の居所と伝え、中世末の小規模な名田屋敷であったと思われる。永禄9年（1566）、木舟城の石黒左近が越後上杉勢の援助をうけて水島の勝満寺を攻めたとき、六右衛門は門使頭であったため庄官屋敷は焼討ちにあたったという。下焼馬は木舟城の石黒氏の二番家老伊藤次右衛門の嫡子弥右衛門が元和元年（1615）に帰農して開墾したところをいう。焼馬は、鷹栖口用水から引いた横江の灌漑区域である。黒河島は水都の黒河からきた黒河作右衛門の開いたところで、今も黒河堂と称する小堂がある。（『鷹栖村史』より抜粹）

埋蔵文化財包蔵地として知られる「小倉の十居」は、不動島の東南隅、神島と鷹栖の境の出町外六ヶ村用水の左岸にある共同墓地となっている場所である。現在も土壙状の高まりを確認することができる。小倉六右衛門が一向一揆の石山合戦に参戦し、石山開城後帰郷し、不動尊を鎮守したことから不動島村と称したとい。

**東野尻** 苗加、野村島から成る。苗加について、貞享元年（1684）十村金屋本江村金右衛門の書上に「先年遠江の國の内苗加村と申す所より牢人參り申候。則ち氏神三王權現も牢人をあわれに思召し、飛び來り候。右牢人生國村名を取り苗加村と申す由、承伝申候」とある。この浪人が苗加村次郎左衛門（河辺氏）で、家譜によると代々近江国苗庭村（現大津市雄琴苗庭町）の郷士であったが、弘治2年（1556）前田利家に属し、越前国今立郡苗鹿（現今立町野岡）に移り、次郎左衛門の代永禄4年（1561）に備波郡に来て庄川の河跡を拓いて土着したとい。野村島は、野川跡新開の一部として開かれた村である。宮は桑野神社、寺は光興寺と知足寺がある。

**五鹿屋** 五鹿屋、五郎丸、鹿島、荒高屋、花島から成る。

五郎丸という地名は、昔庄川が周辺を流れていた頃、五郎丸という船が沈んだことに由来し、宮の社地が船の形をしているのはそのためだとい。しかし、「丸」のつく地名は、中世の開発地名であり、名田の名主の名によるものである。『越中志微』には「郷村名義抄」の記を引いて「此村往古五郎と中者居住仕、屋敷跡に村立出来に付、五郎丸と申出」とある。鹿島は、村名の所見が河合智之氏蔵文書の文禄5年（1596）3月「前田利長、鹿島の内野村鳩新開申付状」である。河合家は野尻川跡に野村島村を開拓し、慶長9年（1604）には野村島境の端光寺島（現鹿島神社周辺）を開くよう利長から命ぜられている。荒高屋の村名は、高屋村（旧井波町）から分出した新村であることによる。野尻川跡であり、隣接する野村島の例などからみて近世初頭の文禄～寛永期（1592～1644）頃に開村したと考えられる。花島は、もとは荒高屋村の一部であった。

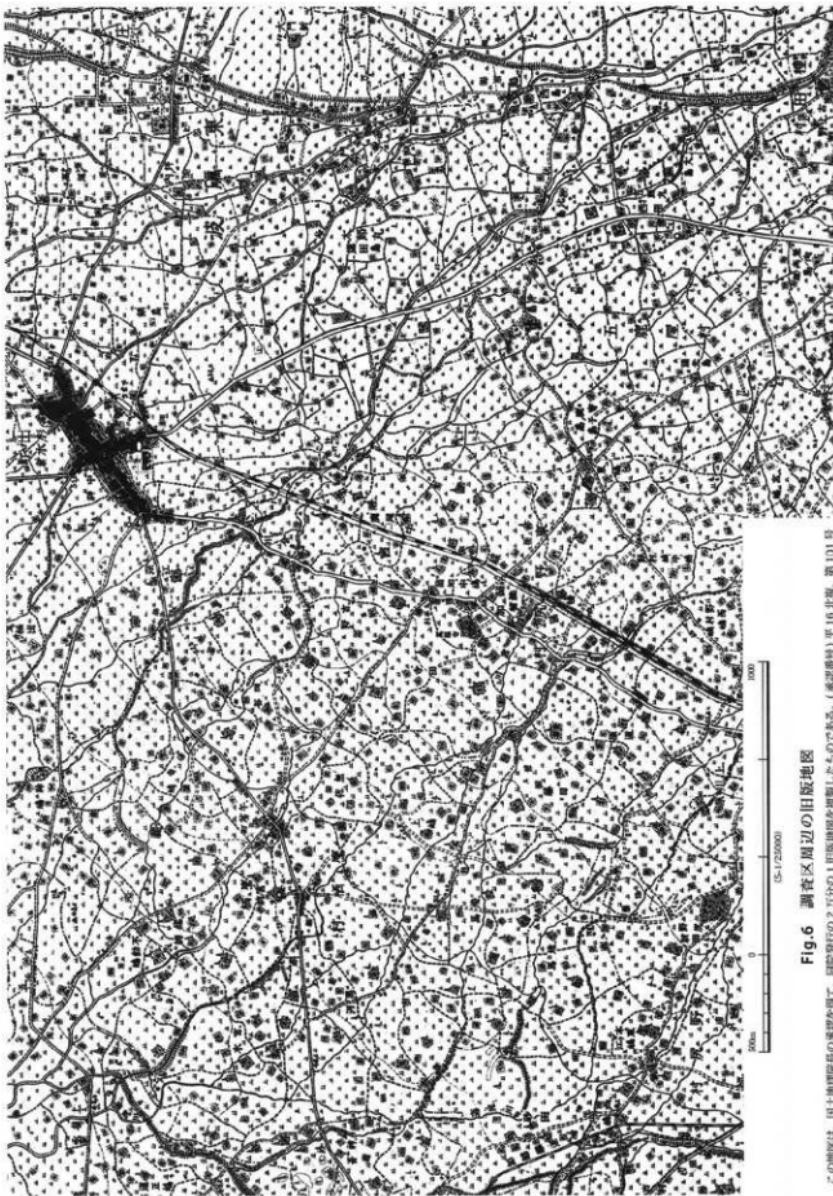


Fig. 6 調査区周辺の旧版地図  
この地図は、国土地理院長の裁認を得て、同院外刊の2万分の1比例地図を複製したものである。(複製番号) 平16北里 第101号

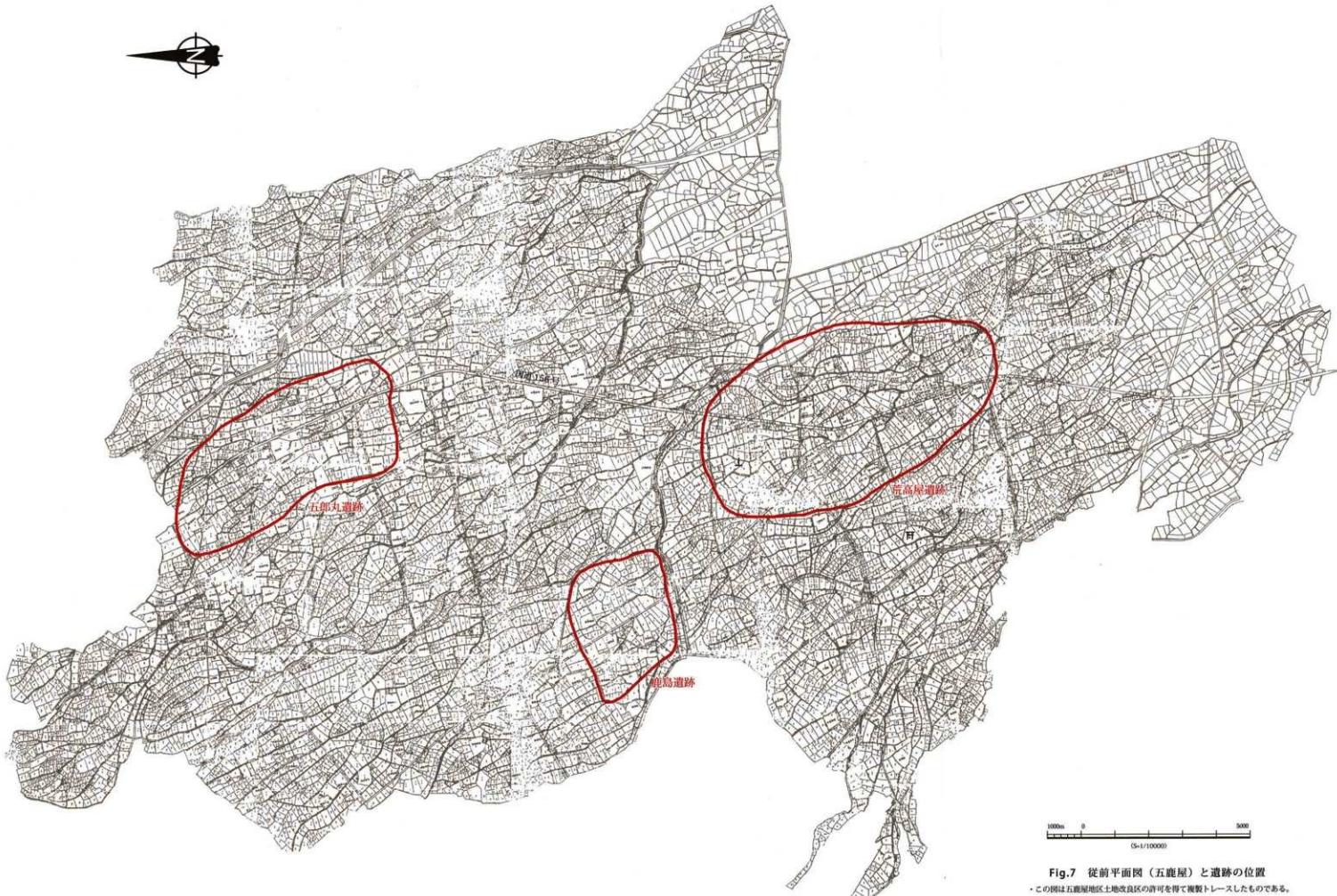


Fig.7 従前平面図（五郎屋）と遺跡の位置  
・この図は五郎屋地区土地改良区の許可を得て複製トレースしたものである。

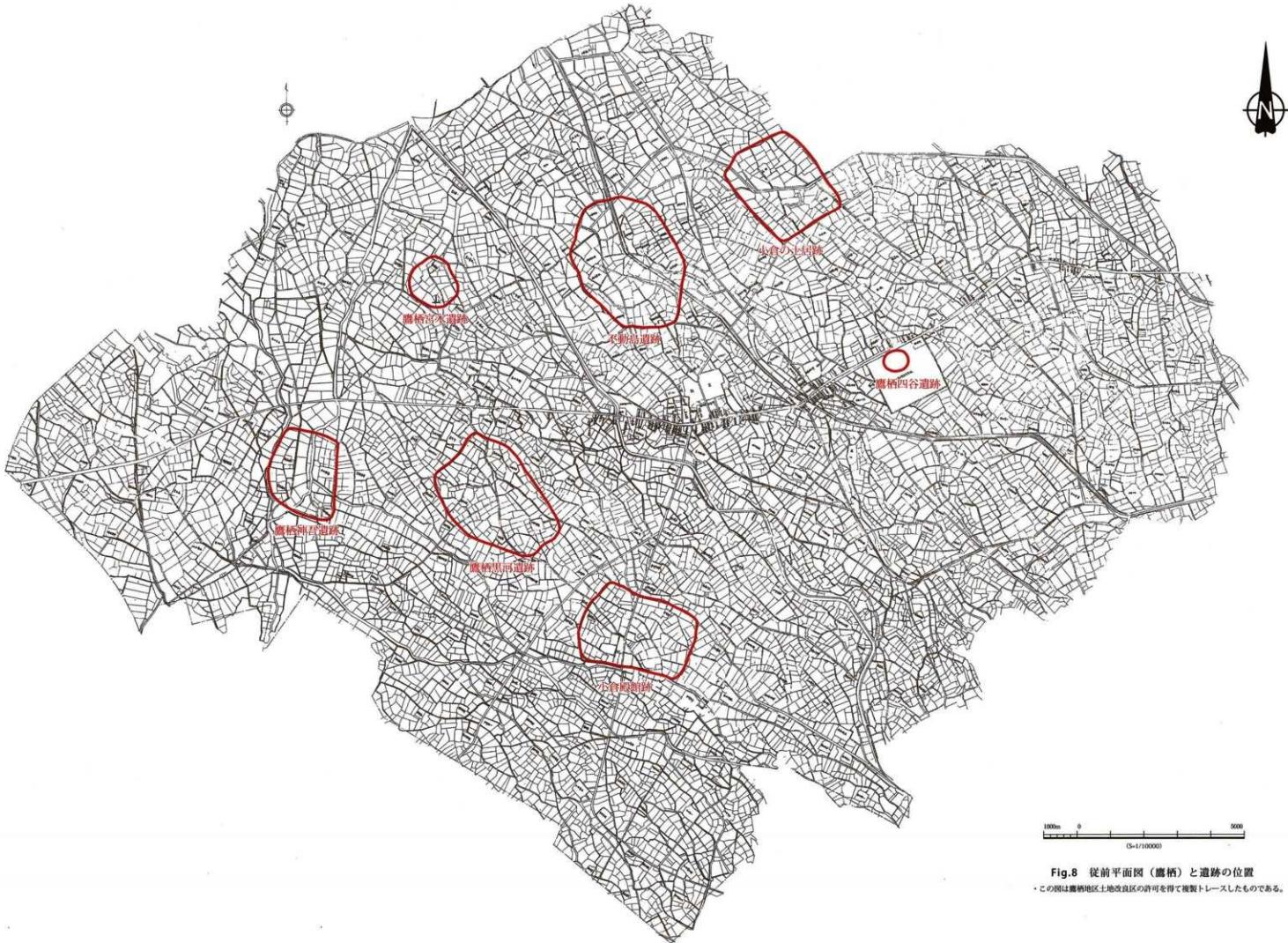


Fig.8 徒歩平面図(鷹栖)と遺跡の位置  
・この図は鷹栖地区土地改良区の許可を得て複製トレースしたものである。

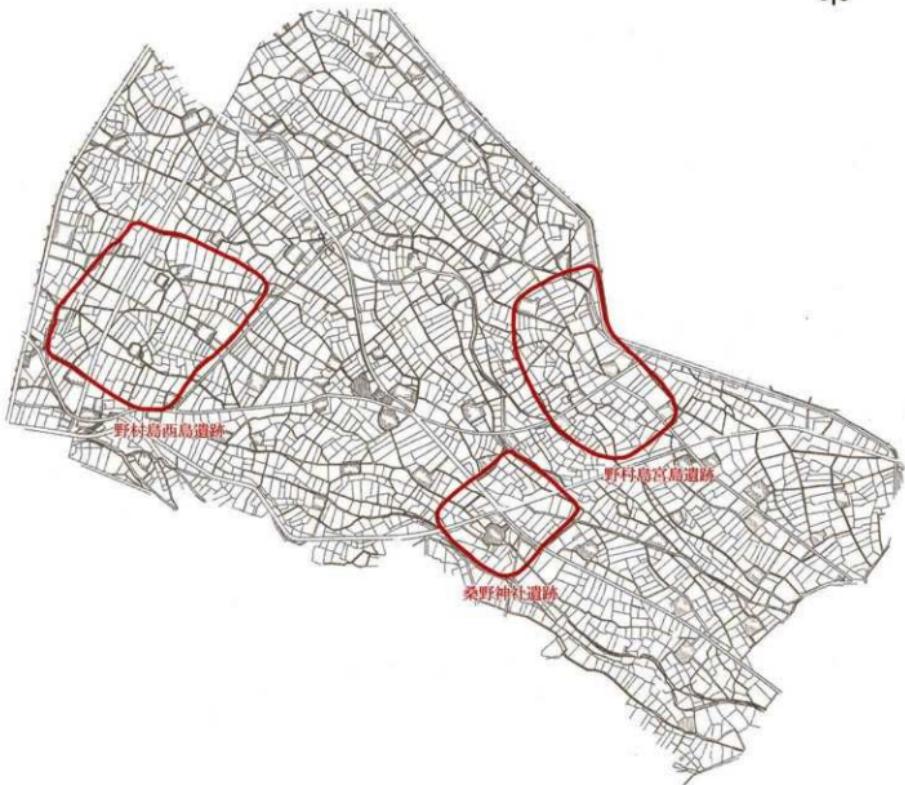


Fig.9 従前平面図（東野尻）と遺跡の位置  
・この図は五鹿屋地区土地改良区の許可を得て複製トレースしたものである。

## 2 採集遺物

**遺物構成** 採集遺物の時期別点数は、縄文1点、古代1点、中世10点、近世294点、近代・時期不明81点、合計394点である。種類は、縄文石器、須恵器、土師器、珠洲、白磁、瀬戸・美濃、越中瀬戸、肥前陶器、信楽、錢貨等で構成される。近世・近代以降の遺物が95%を占める。

**分布状況** 五鹿屋地区には国道156号に沿って南北に長い微高地が存在し、古代・中世・近世の遺物が多く分布する。近世・近代遺物が現在の集落周辺部に密に分布する傾向にあり、東野尻、鷹栖の各地で確認できる。鷹栖地区では小倉殿館跡、小倉の上居跡付近に近世遺物が集在し、黒河や不動島付近には古代・中世遺物が分布している。

**遺物解説** 32は越中瀬戸の皿であり、鋸釉がかかる。142は銭貨であるが、銘化が著しく字文は判読できない。165は関西系の軟質施釉陶器で内外面に布目痕が残り、18～19世紀のものと考えられる。194は越中瀬戸の燭台脚部である。265は近世の土鉢であり、穴を穿った懸垂用の突起から脇部下端の穴まで約半分残る。276は珠洲の壺口縁部であり、形態から吉岡康暢氏編年Ⅱ～Ⅲ期に相当する。387は珠洲の片口鉢の口縁部である。

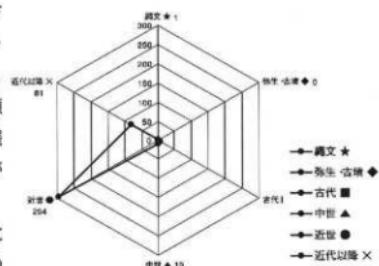


Fig.10 採集遺物の時期別点数

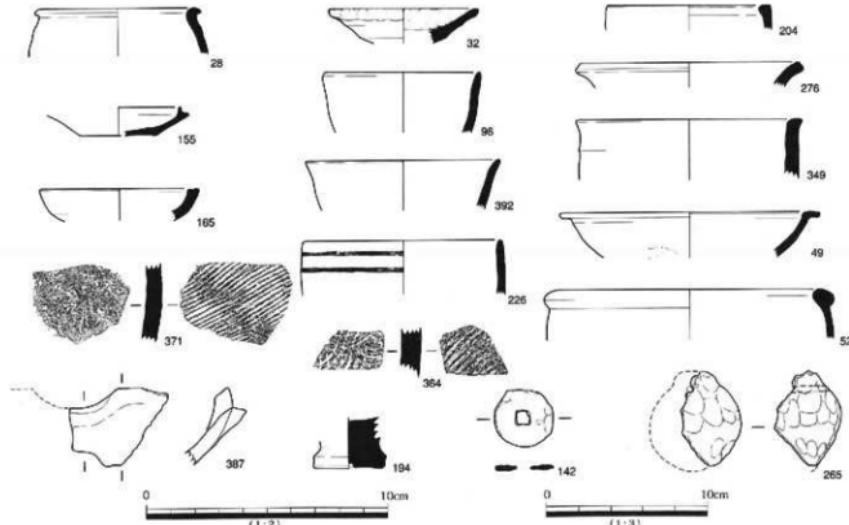


Fig.11 遺物実測図

※ 142,265のみ縮尺 1/2

Tab.4 探査遺物一覧(1)

植物名	植物情報	時期	マーク	植物名	植物情報	時期	マーク
1 肥前橘	近世	●	81 鮎中梅戸	近世	●	161 肥前橘	18c
2 近世橘	近世	●	82 近世	●	162 肥前梅	近世	
3 近世橘	近世	●	83 近世	●	163 肥前梅	近世	
4 近世橘	近世	●	84 近世	●	164 近世	近世	
5 椿中海藻	19c	×	85 近世	●	165 国産草食性魚類南高麗	18~19c	
6 肥前橘	18c	●	86 近世	●	166 肥前泡泡	近世	
7 近世陶器	近世	●	87 近世	●	167 肥前泡泡	近世	
8 近世陶器	近世	●	88 近世	●	168 肥前泡泡	近世	
9 近世陶器	近世	●	89 近世	●	169 肥前泡泡	近世	
10 磁器	近世	●	90 近世	●	170 肥前泡泡	近世	
11 磁器	近世	●	91 近世	●	171 近世泡泡	近世	
12 磁器	近世	●	92 近世	●	172 肥前泡泡	近世	
13 磁器	近世	●	93 近世	●	173 肥前泡泡	近世	
14 十字架	古代	●	94 近世	●	174 肥前泡泡	近世	
15 近世陶器	19c	●	95 近世	●	175 肥前泡泡	近世	
16 瓦?	不明	×	96 前南島器	中海戸	176 肥前泡泡	近世	
17 士師器	中世?	▲	97 鮎中泡泡	近世	177 鳥羽(鳥羽朱雀?)	肥前泡泡?	
18 瓦吳器	不明	●	98 陶器	不明	178 磁器	肥前泡泡?	
19 近世磁器	19c	●	99 鮎中泡泡	近世	179 磁器	肥前泡泡?	
20 近世磁器	近世	●	100 肥前泡泡	近世	180 磁器	肥前泡泡?	
21 近世磁器	近世	●	101 肥前泡泡	近世	181 近世泡泡	肥前泡泡?	
22 磁器	近世	●	102 肥前泡泡	近世	182 肥前泡泡	肥前泡泡?	
23 磁器	不明	●	103 肥前泡泡	近世	183 肥前泡泡	肥前泡泡?	
24 磁器	不明	●	104 肥前泡泡	近世	184 肥前泡泡	肥前泡泡?	
25 肥前泡泡	18c	●	105 肥前泡泡	近世	185 破片?	肥前泡泡?	
26 鹿山泡泡	近世	●	106 肥前泡泡	18c	186 近世泡泡	肥前泡泡?	
27 仁王泡泡	近世	●	107 泡泡	不明	187 近世泡泡	肥前泡泡?	
28 近世泡泡	近世	●	108 泡泡	近世	188 近世泡泡	肥前泡泡?	
29 仁王泡泡	近世	●	109 泡泡	近世	189 肥前泡泡	肥前泡泡?	
30 泡泡	近世	●	110 泡泡	近世	190 仁王泡泡	肥前泡泡?	
31 泡泡	近世	●	111 泡泡	近世	191 仁王泡泡	肥前泡泡?	
32 泡泡	近世	●	112 泡泡	近世	192 磁器	肥前泡泡?	
33 泡泡	近世	●	113 泡泡	近世	193 磁器	肥前泡泡?	
34 石碗	既往石碗用?	●	114 泡泡	近世	194 越中泡泡	肥前泡泡?	
35 近世泡泡	近世	●	115 泡泡	近世	195 寺器	肥前泡泡?	
36 近世泡泡	近世	●	116 泡泡	近世	196 肥前泡泡	肥前泡泡?	
37 近世泡泡	近世	●	117 泡泡	近世	197 近世泡泡	肥前泡泡?	
38 泡泡	近世	●	118 泡泡	近世	198 近世泡泡	肥前泡泡?	
39 泡泡	近世	●	119 泡泡	近世	199 磁器	肥前泡泡?	
40 泡泡	近世	●	120 泡泡	近世	200 磁器	肥前泡泡?	
41 泡泡	近世	●	121 泡泡	近世	201 近世泡泡	肥前泡泡?	
42 泡泡	近世	●	122 泡泡	近世	202 近世泡泡	肥前泡泡?	
43 泡泡	近世	●	123 泡泡	近世	203 磁器	肥前泡泡?	
44 泡泡	近世	●	124 泡泡	近世	204 越中泡泡	肥前泡泡?	
45 近世泡泡	近世	●	125 泡泡	近世	205 泡泡	肥前泡泡?	
46 近世泡泡	近世	●	126 泡泡	近世	206 泡泡	肥前泡泡?	
47 近世泡泡	近世	●	127 泡泡	近世	207 泡泡	肥前泡泡?	
48 近世泡泡	近世	●	128 泡泡	近世	208 泡泡	肥前泡泡?	
49 近世泡泡	近世	●	129 泡泡	近世	209 泡泡	肥前泡泡?	
50 近世泡泡	近世	●	130 泡泡	近世	210 泡泡	肥前泡泡?	
51 近世泡泡	近世	●	131 泡泡	近世	211 泡泡	肥前泡泡?	
52 近世泡泡	近世	●	132 泡泡	近世	212 泡泡	肥前泡泡?	
53 泡泡	近世	●	133 泡泡	近世	213 泡泡	肥前泡泡?	
54 海戸美濃	28c	●	134 泡泡	越中泡泡	214 泡泡	肥前泡泡?	
55 近世泡泡	近世	●	135 泡泡	肥前泡泡	215 泡泡	肥前泡泡?	
56 近世泡泡	近世	●	136 泡泡	肥前泡泡	216 泡泡	肥前泡泡?	
57 通仁王泡泡	近世	●	137 泡泡	越中泡泡	217 泡泡	肥前泡泡?	
58 仁王泡泡	近世	●	138 泡泡	肥前泡泡	218 泡泡	肥前泡泡?	
59 仁王泡泡	近世	●	139 泡泡	肥前泡泡	219 泡泡	肥前泡泡?	
60 仁王泡泡	近世	●	140 泡泡	肥前泡泡	220 泡泡	肥前泡泡?	
61 仁王泡泡	近世	●	141 泡泡	肥前泡泡	221 泡泡	肥前泡泡?	
62 肥前泡泡	18c	●	142 泡泡	肥前泡泡	222 泡泡	肥前泡泡?	
63 肥前泡泡	近世	●	143 泡泡	肥前泡泡	223 泡泡	肥前泡泡?	
64 肥前泡泡	近世	●	144 泡泡	肥前泡泡	224 泡泡	肥前泡泡?	
65 近世泡泡	近世	●	145 泡泡	肥前泡泡	225 泡泡	肥前泡泡?	
66 近世泡泡	近世	●	146 泡泡	肥前泡泡	226 泡泡	肥前泡泡?	
67 近世泡泡	近世	●	147 泡泡	肥前泡泡	227 泡泡	肥前泡泡?	
68 近世泡泡	近世	●	148 泡泡	石製品?	228 泡泡	肥前泡泡?	
69 近世泡泡	近世	●	149 泡泡	白磁	229 泡泡	肥前泡泡?	
70 近世泡泡	近世	●	150 泡泡	白磁	230 泡泡	肥前泡泡?	
71 近世泡泡	近世	●	151 土器	中世?	231 泡泡	肥前泡泡?	
72 十字架	古代	●	152 土器	近世	232 泡泡	肥前泡泡?	
73 近世泡泡	近世	●	153 土器	近世	233 泡泡	肥前泡泡?	
74 近世泡泡	近世	●	154 土器	近世	234 泡泡	肥前泡泡?	
75 近世泡泡	近世	●	155 土器	18c	235 泡泡	肥前泡泡?	
76 近世泡泡	近世	●	156 土器	19~20c	236 近世泡泡	肥前泡泡?	
77 近世泡泡	近世	●	157 土器	近世	237 近世泡泡	肥前泡泡?	
78 近世泡泡	近世	●	158 土器	近世	238 近世泡泡	肥前泡泡?	
79 近世泡泡	近世	●	159 土器	石製品?	239 近世泡泡	肥前泡泡?	
80 近世泡泡	近世	●	160 土器	不明	240 近世泡泡	肥前泡泡?	

Tab.5 採集遺物一覧(2)

遺物番号	遺物性質	時期	マーク	出土手順	種類	マーク	遺物番号
241	陶器	近世	●	321	肥前陶器+磁器	近便	●●
242	瓶戸美濃	18c	●	322	肥前陶器+磁器	近近便	●●
243	肥前磁器	近世	●	323	近便	不不明	×
244	肥前磁器	近世	●	324	唐器	中	●▲●●
245	近世陶器	近世	●	325	磁器	近近世	不不明
246	越中陶戸	近世	●	326	上部器	中世	不不明
247	肥前磁器	近世	●	327	近世陶器	近近世	不不明
248	越中陶戸 木人(火入丸)	近世	●	328	越中陶戸	近近世	不不明
249	越中陶戸 备芦	近世	●	329	陶器	六	×××
250	肥前陶器	近世	●	330	磁器	不	●
251	肥前陶器	19c	●	331	陶器	不明	●●●
252	越中陶戸	18c	●	332	陶器	近	●●●
253	肥前陶器	近世	●	333	陶器	近	●●●
254	肥前陶器	近世	●	334	肥前陶器	近	●●●
255	七輪	不明	×	335	陶器	不明	●
256	磁器	不明	×	336	陶器	不明	●
257	肥前陶器	近世	●	337	十管	不明	●
258	越中陶戸	近世	●	338	肥前陶器	18c	●●●
259	陶器	不明	×	339	越中美濃	近近世	●●●
260	芒の陶器	近世	●	340	肥前陶器	18c	●●●
261	陶器	不明	×	341	磁器	不明	●
262	肥前磁器	近世	●	342	磁器	不明	●
263	肥前磁器	近世	●	343	磁器	近	●●●
264	陶器	不明	×	344	近世羽器	近世	●●●
265	上製品(土鉢)	近世	●	345	近世司器	近世	●●●
266	上鉢	中世	●	346	近世司器	近世	●●●
267	越中陶戸	近世	●	347	肥前陶器	18c	●●●
268	磁器	不明	●	348	越中陶戸	近世	●●●
269	越中陶戸	近世	●	349	越中陶戸	近世	●●●
270	越中陶戸	17c	●	350	近世陶器	近世	●●●
271	越中陶戸	近世	●	351	近世出世馬	近世	●●●
272	肥前陶器	近世	●	352	近世出世馬	近世	●●●
273	越中陶戸	近世	●	353	近世出世馬	近世	●●●
274	肥前磁器	近世	●	354	近世出世馬	近世	●●●
275	須恵器	古代	■	355	近世出世馬	近世	●●●
276	珠	珠	▲	356	越中陶戸	近世	●●●
277	肥前陶器	近世	●	357	越中陶戸	近世	●●●
278	近世・近世・十器	近世	●	358	磁器	不明	●
279	近世・近世・十器	近世	●	359	近世陶器	近世	●●●
280	近世・近世・十器	近世	●	360	近世陶器	近世	●●●
281	近世・近世・十器	近世	●	361	近世陶器	近世	●●●
282	肥前磁器	近世	●	362	近世陶器	近世	●●●
283	磁器	19c	●	363	須恵器	古	●●●
284	越中陶戸	近世	●	364	越中陶戸	古	●●●
285	肥前陶器	近世	●	365	須恵器	古代	●●●
286	七輪	中世	▲	366	近世陶器	古代	●●●
287	信楽	近世	●	367	越中陶戸	古代	●●●
288	肥前陶器	近世	●	368	須恵器	古代	●●●
289	土師器	古代	■	369	内面黑色土器	古	●●●
290	肥前陶器	近世	●	370	須恵器	古	●●●
291	越中陶戸	近世	●	371	近世陶器	古代	●●●
292	肥前磁器	18c	●	372	珠	近代	●●●
293	灰	中世	▲	373	近世陶器	近代	●●●
294	越中陶戸	近世	●	374	肥前陶器	近代	●●●
295	磁器	不明	×	375	肥前陶器	近代	●●●
296	磁器	不明	×	376	七輪	近代	●●●
297	肥前陶器	近世	●	377	肥前陶器	近代	●●●
298	肥前陶器	近世	●	378	肥前陶器	近代	●●●
299	磁器	不明	×	379	肥前陶器	近近世	●●●
300	近世土器・質・質	近世	●	380	近世土器	近近世	●●●
301	陶器	不明	●	381	越中陶戸	近近世	●●●
302	磁器	不明	●	382	珠	近近世	●●●
303	陶器	不明	●	383	肥前陶器	近近世	●●●
304	近世磁器	近世	●	384	肥前陶器	近近世	●●●
305	磁器	不明	●	385	越中陶戸	近近世	●●●
306	近世磁器	近世	●	386	陶器	近近世	●●●
307	近世陶器 梅	近世	●	387	越中陶戸	V 18c	●●●
308	肥前陶器	近世	●	388	珠	不明	●●●
309	肥前陶器	近世	●	389	陶器	近近世	●●●
310	肥前陶器	近世	●	390	近世磁器	近近世	●●●
311	肥戸美濃	17c	●	391	越中陶戸	近近世	●●●
312	肥前陶器	近世	●	392	肥前陶器	近近世	●●●
313	磁器	不明	×	393	近世陶器	近近世	●●●
314	肥前陶器	近世	●	394	肥前陶器	18c	●●●
315	近世磁器	近世	●				
316	近世陶器	近世	●				
317	肥前陶器	近世	●				
318	肥前磁器	近世	●				
319	近世磁器	近世	●				
320	近世磁器	近世	●				

### 3 遺跡各説

遺跡名	荒高屋遺跡 [新規]	遺跡番号	一	地図	NJ531211
所在地	砺波市荒高屋	現況	水田・宅地		
種別	散布地	時代	古代・中世・近世		
遺物番号	8, 9, 11, 12, 14, 15, 16, 324, 327, 328, 329, 330, 332, 334				
包蔵地	荒高屋の南域に近世を中心とする遺物が濃密に分布しており、古代に属する上師器片(14)も採集している。14は、粗い砂粒を含み、内面は黒色を呈することから表の胸部片と思われるが、胎土の状態から古代以前に遡る可能性がある。また、尖相寺北側の墓地には、五輪塔の空輪が安置されている。この遺物分布域は、広いマッド地形上に位置し、周辺部よりやや高い微高地となっている。この微高地東側は、圃場整備前の從前図を見ると南北に長い楕円形状に高まりが確認できる。庄川扇状地上において奈良・平安期の遺跡がマッド上の微高地に存在する事例が多いことを考慮し、從前図等から見て地形的に高い部分から傾斜変換する範囲を包蔵地として認定した。				
調査歴	なし				
文献	なし				
遺跡名	五郎丸遺跡 [新規]	遺跡番号	一	地図	NJ531211
所在地	砺波市五郎丸	現況	水田・宅地		
種別	散布地	時代	近世		
遺物番号	26, 27, 28, 30, 31, 33, 35, 36, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47				
包蔵地	国道156号沿いの五郎丸集落縁辺は、古代・中世・近世の遺物が集中している。範囲外の採				
認定	集だが、17の中世上師器片1点、72の古代土師器片1点がある。これら古代・中世期の遺物採集地点を除外して包蔵地範囲としたのは、河道の蛇行が逸れて楕円形状の微高地が認められるからである。扇状地の場合、圃場整備前の水田形状は長辺が等高線に平行し、短辺が河川の流路方向を示す。包蔵地とした部分は、長辺が流路方向をとり、数枚の水田で方形区画のようなまとまりが見受けられる。すなわち地形的に平坦であり、河道の影響を受けていないことを物語る。17・72の地点は、この微高地縁辺もしくは河道跡にあたる。				
調査歴	なし				
文献	なし				
遺跡名	鹿島遺跡 [新規]	遺跡番号	一	地図	NJ531211
所在地	砺波市荒高屋	現況	水田・宅地		
種別	散布地	時代	近世		
遺物番号	88, 89, 90, 91, 92				
包蔵地	遺物は、近世期のものを5点採集しているにすぎないが、マッド上の微高地縁辺に位置する				
認定	ことから、包蔵地として認定した。				
調査歴	なし				
文献	なし				

遺跡名	野村島宮島遺跡	[新規]	遺跡番号	一	地図	NJ531211
所在地	砺波市野村島	現況	水田・宅地			
種別	散布地	時代	近世			
遺物番号	131, 132, 133, 138, 139, 140, 142					
包蔵地	宮島の集落は、南北に長いマット上に位置している。從前図を確認すると、周囲が小河道の					
認定	蛇行原に囲まれた地形があり、水田区画が楕円状の微高地形状を示している。遺物は、近世・ 近代期のものしか採集されていないが、庄川扇状地上において奈良・平安期の遺跡がマット 上の微高地に存在する事例が多いことを考慮し、從前図等から見て地形的に高い部分から傾 斜変換する範囲を包蔵地として認定した。					
調査歴	なし					
文献	なし					
遺跡名	野村島西島遺跡	[新規]	遺跡番号	一	地図	NJ531211
所在地	砺波市野村島	現況	水田・宅地			
種別	散布地	時代	中世			
遺物番号	151					
包蔵地	遺物は、中世期と考えられる土師器片を1点採集している。從前図を確認すると、遺物採集					
認定	地点を西端とし、短冊形の水田区画が規則的に並ぶ状況である。これは、中世期もしくは近 世期に遡る方形区割を反映する可能性もあることから、これら区画群をひとつのまとまりと して包蔵地認定した。					
調査歴	なし					
文献	なし					
遺跡名	桑野神社遺跡	[新規]	遺跡番号	一	地図	NJ531211
所在地	砺波市野村島	現況	水田・宅地			
種別	散布地	時代	中世			
遺物番号	150					
包蔵地	遺物は、白磁片を1点採集している。器種は碗であり、高台と体部が残るが口縁部が欠損し					
認定	ているため、口径を復元することはできない。胎上や器形から時期は、15世紀代と考えられ る。遺物採取地点の付近には桑野神社があり、神社を中心として方形の区画が形成されている。 文献史料では、市指定文化財・河合文書「正徳二年社引帳」までしか遡り得ないため、方形 区画が神社に起因するものかわからないが、中世期の構造物の可能性もあるため、この範囲 を包蔵地として認定した。					
調査歴	なし					
文献	なし					

遺跡名	鷹栖四谷遺跡	〔変更なし〕	遺跡番号	208088	地図	NJ531211
所在地	砺波市鷹栖	現況	県立高校敷地			
種別	中世墓	時代	中世			
遺物番号	一					
包蔵地	明治42年、県立砺波中学校の校舎基礎工事中に珠洲陶壺(14世紀、吉岡康暢氏編年第IV期)					
認定	が発見されたと伝える。壺は、底部穿孔がなされ藏骨器として埋置されたと見られている。					
	周辺から包蔵地として範囲拡大・内容変更の根拠となるような遺物の採集は、なかった。					
	同じく從前図による検討を行ったが、現状変更する要素はない。					
調査歴	なし					
文献	砺波市史編纂委員会 1990『砺波市史資料編1考古古代・中世』, p244					

遺跡名	小倉の土居跡	〔範囲変更〕	遺跡番号	208089	地図	NJ531211
所在地	砺波市鷹栖	現況	墓地・耕作地			
種別	中世城館	時代	中世			
遺物番号	352, 353, 354, 355, 394					
包蔵地	現在は不動島の墓地となっており、土塁の上に墓が立					
認定	ち並んでいる。同じ鷹栖地内の小倉殿館跡にいた土豪小倉六右衛門の子孫小倉孫左衛門が天正年間(1573~1592)に居住した屋敷跡と伝える。北側を除く三面にコの字形の土塁が確認でき、市史では圃場整備前の「不動島」地引図から40m四方の方形容郭プランを復元している。今回採集した遺物は、近世陶器のみである。これまでの包蔵地を包括し、方形地割の残る範囲を包蔵地として範囲変更した。					
調査歴	なし					
文献	砺波市史編纂委員会 1990『砺波市史資料編1考古古代・中世』, p811 高岡徹 1980『富山県』『日本城郭体系第7巻』新人物往来社, p344					



(鷹栖村「不動島」地引図より作図)

遺跡名	不動島遺跡	〔新規〕	遺跡番号	一	地図	NJ531211
所在地	砺波市鷹栖	現況	水田・宅地			
種別	散布地	時代	古代・近世			
遺物番号	363, 364, 365, 366, 367, 369					
包蔵地	調査区でもっとも古代の遺物が採集された場所である。須恵器、内面黒色土器が採集されて					
認定	いる。この付近は、北西方向に延びるマッドに包括されている。庄川扇状地上において奈良・平安期の遺跡がマッド上の微高地に存在する事例が多いことを考慮し、從前図等から見て地形的に高い部分から傾斜変換する範囲を包蔵地として認定した。					
調査歴	なし					
文献	なし					

遺跡名	鷹栖宮木遺跡	〔新規〕	遺跡番号	—	地図	NJ531211
所在地	砺波市鷹栖		現況	水田・宅地		
種別	散布地		時代	中世・近世		
遺物番号	381, 382, 383					
包蔵地	浮島状に墓地が存在する。墓地では土器片等の遺物は採集できなかったが、中世期と考えられる五輪塔の空風輪等の残骸が散乱していた。その五輪塔が原位置を保っているか定かではないが、從前図等から見て地形的に高い部分を包蔵地として認定した。					

調査歴  
なし  
文献  
なし

遺跡名	小倉殿館跡	〔範囲変更〕	遺跡番号	208090	地図	NJ531211
所在地	砺波市鷹栖		現況	水田・宅地		
種別	中世城館		時代	中世		
遺物番号	238, 241, 277					
包蔵地	別名、庄官屋敷、鷹栖館ともいう。遺構は圃場整備によって消滅したが、以前は地引図にあるように周囲を堀で囲まれた、ほぼ方形のプランを示す地割をとどめていた。地元では、館跡の田を「ロッキヨンづくり」と呼んだが、これは戦国期に居住したとされる土豪小倉六右衛門にちなんだのである。伝承によると、六右衛門は明応年間(1492~1501)に上杉氏より「中の名」・「中の明」といわれる土地を与えられたという。永禄9年(1566)、木舟城主石黒左近は一向宗の勝満寺(現小矢部市水島)に攻撃を加え、この時、同寺の有力門徒であった六右衛門の館も焼き討ちにあったと伝えられる。六右衛門の子孫小倉孫左衛門は、その後天正年間(1573~1592)に鷹栖村の不動島を開いて村の草分けとなり、小倉の土居に居住したといわれる。					
認定	今回の調査では、中世以前の遺物は採集できなかったが、從前図に方形の地割がみられるため、包蔵地の範囲を変更した。					

調査歴  
なし  
文献  
砺波市史編纂委員会 1967『砺波市史』, p249  
砺波市史編纂委員会 1990『砺波市史資料編1考古古代・中世』, p809  
高岡徹 1980『富山県』『日本城郭体系第7巻』新人物往来社, p343



遺跡名	たかのすくろかわ 鷹栖黒河遺跡	[新規]	遺跡番号	一	地図	NJ531211
所在地	砺波市鷹栖		現況	水田・宅地		
種別	散布地		時代	古代・近世		
遺物番号	265, 268, 269, 270, 271, 272, 273, 275					
包藏地	調査区で数少ない古代の遺物が採集された場所である。小破片であるが須恵器が採集されて					
認定	いる。この付近は、北西方向に延びる細長いマップに包括されている。庄川扇状地上において奈良・平安期の遺跡がマップ上の微高地に存在する事例が多いことを考慮し、從前岡等から見て地形的に高い部分から傾斜変換する範囲を包藏地として認定した。黒河堂には室町時代製作とされる如来形石仏があることも包藏地認定の要素とした。					
調査歴	なし					
文献	なし					

遺跡名	たかのすじんご 鷹栖神吾遺跡	[新規]	遺跡番号	一	地図	NJ531211
所在地	砺波市鷹栖		現況	水田・宅地		
種別	散布地		時代	古代・中世・近世		
遺物番号	284, 286, 289, 291					
包藏地	古代・中世の土師器を採集している。古代土師器(289)は煮沸具である長胴甕の口縁部であり、					
認定	端部を折り返す。小破片のため口径を復元することはできない。中世土師器の器種は、皿と考えられる。地形的には、南東方向からの河道が続いており、また西側には南北方向に氾濫原が伸びており、両者が交差する地点にある。この交差する地点で傾斜が変換し、方形水田のまとまりがある。これは地形的に高い部分と考えられるため、遺物採集地点を包括する範囲を包藏地として認定した。					
調査歴	なし					
文献	なし					

## 参考文献

- 有賀正一郎他編 2001 「歴史地理調査ハンドブック」 古今書院
- 犬伏和之・安西徹郎編 2001 「土壤学概論」 朝倉書店
- 大垣市教育委員会文化部 1997 「大垣市遺跡詳細分布調査報告書 解説編」
- 神島利夫 1982 「地形地質」「地下水利用等基礎調査報告書」 富山県
- 鈴木隆介 1998 「建設技術者のための地形図読図入門 第2巻 低地」 古今書院
- 高橋 学 2003 「平野の環境考古学」 古今書院
- 竹村利夫 1978 「砺波平野南部地域の段丘地形」「地理学評論」 vol.51-9
- 地学団体研究会編 1994 「新版地学教育講座 9 地表環境の地学-地形と土壤-」 東海大学出版会
- 砺波市・砺波市土地改良協会 1985 「砺波市は場整備完成記念誌」
- 砺波市史編纂委員会 1990 「砺波市史資料編 1 考古 古代・中世」
- 1996 「砺波市史資料編 5 集落」
- 富山県農地林務部は場整備課 1981 「土地分類基本調査 城嶺」
- 1970 「土地分類基本調査 石動」
- 外山秀一 1997 「プラント・オバールからみた砺波平野の土地利用と黒土層の特性」  
「砺波散村地域研究所研究紀要第13号」 砧波市立砺波散村地域研究所
- 久間一剛他編 1993 「土壤の事典」 朝倉書店
- 深井三郎 1976 「富山の地形と地質」 富山県自然保護課

### 第3章 まとめ

- 調査所見** 今年度の調査対象地は、初年度ということで旧砺波市内でも特に埋蔵文化財包蔵地が希薄な地区を選定している。これまで鷹栖地区にある鷹栖四谷遺跡、小倉の土居跡、小倉殿館跡の3箇所を数えるに過ぎず、いずれも中世の遺跡である。古代もしくはそれ以前に遡る遺跡は知られていなかったが、地質学の見地から庄川扇状地にみられる微高地上のマッドの存在が指摘されていた。これまで千代遺跡や小杉遺跡、久泉遺跡など古代の遺跡がマッド上に発見される場合が多いことから、今回の調査対象地も古代遺跡が存在する可能性があると予見していた。実際に踏査してみると数は少ないものの、須恵器、土師器といった古代遺物が採集され、遺跡の存在が裏付けられる結果となった。ただし、縄文・弥生・古墳時代の遺物に関しては、皆無である。
- 鷹栖** もっとも広大な調査区であり、圃場整備前の地形図では蛇行する流路が幾筋も確認できた。包蔵地存在の可能性は低いと考えていたが、先述の中世遺跡だけでなく、鷹栖黒河遺跡、鷹栖神吾遺跡が古代に属することが判明した。遺物採集だけであるので散布地として扱うが、今後の調査によっては、古代の集落遺跡となる可能性もある。
- 東野尻** 東野尻は野川川の川跡を近世期に開拓してきた村と考えられており、これまで遺跡の存在は知られていない。桑野神社遺跡では中世の白磁碗、野村島西島遺跡では同じく中世の土師器片を採集しており、近世の開拓以前にも何らかの生活痕跡があることが判明した。
- 五鹿屋** 五鹿屋地区も遺跡のない地域だったが、他の地区と同様、マッドが南北に長い微高地上に存在することが知られていた。荒高屋遺跡で古代の土師器片、また五郎丸遺跡の近辺でも土師器片を採集しており、古代遺跡が存在することが判明している。

Tab.5 調査遺跡一覧

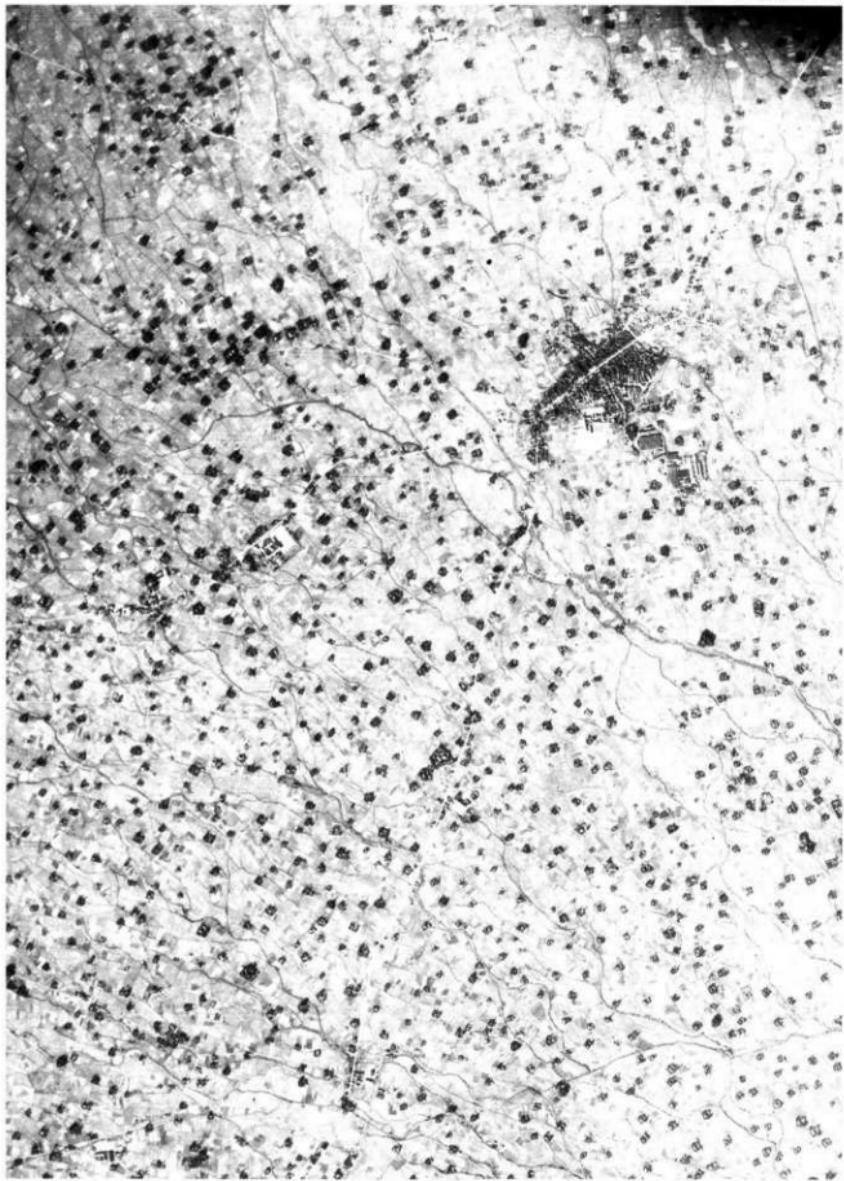
遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	摘要
1	荒高屋遺跡	砺波市荒高屋	古代・中世・近世	新規
2	五郎丸遺跡	砺波市五郎丸	近世	新規
3	鹿島遺跡	砺波市鹿島	近世	新規
4	野村島宮島遺跡	砺波市野村島	近世	新規
5	野村島西島遺跡	砺波市野村島	中世	新規
6	桑野神社遺跡	砺波市野村島	中世	新規
7	鷹栖四谷遺跡	砺波市鷹栖	中世	変更なし
8	小倉の土居跡	砺波市鷹栖	中世	範囲変更
9	不動島遺跡	砺波市鷹栖	古代・近世	新規
10	鷹栖宮木遺跡	砺波市鷹栖	中世・近世	新規
11	小倉殿館跡	砺波市鷹栖	中世	範囲変更
12	鷹栖黒河遺跡	砺波市鷹栖	古代・近世	新規
13	鷹栖神吾遺跡	砺波市鷹栖	古代・中世・近世	新規

\*新規 10 遺跡、範囲変更 2 遺跡

# 報告書抄録

ふりがな	となみしいせきしうさいぶんぶちょうさほうこく いち					
書名	砺波市遺跡詳細分布調査報告1					
副題	鷹栖・東野尻・五鹿屋					
編著者名	野原大輔(砺波市教育委員会生涯学習課)					
編集・発行機関	砺波市教育委員会					
所在地	〒932-0393 富山県砺波市庄川町青島 401 番地 TEL0763-82-1904					
発行年月日	平成17年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査原因
所	在	市町村	遺跡番号			
しないいせき	とやまけんとなみした かのす・のうか・のむ らじま・ごろうまる・ かのしま・あらだかや・ はなしも	162086	-	36度39分5秒	137度2分52秒	市内遺跡詳細 分布調査事業
市内遺跡	富山県砺波市鷹栖・ 苗加・野村島・五 郎丸・鹿島・荒高屋・ 花島			調査面積	調査期間	
				-	2004.4.13～ 2005.3.27	
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
市内遺跡	-	-	-	-		
荒高屋遺跡	散布地	古代・中世・近世	-	土師器、石器、越中瀬戸、近世陶磁器		
五郎丸遺跡	散布地	近世	-	越中瀬戸、近世土師器、近世陶磁器		
鹿島遺跡	散布地	近世	-	近世陶磁器		
野村島宮島遺跡	散布地	近世	-	近世陶磁器		
野村島内島遺跡	散布地	中世	-	土師器		
桑野神社遺跡	散布地	中世	-	白磁		
鷹栖四谷遺跡	墓地?	中世	-	-		
小倉の上居跡	城館	中世	-	近世陶磁器		
不動鳥遺跡	散布地	古代・近世	-	須恵器、内面黒色土器、越中瀬戸、 近世陶磁器		
鷹栖宮木造跡	散布地	中世・近世	-	越中瀬戸、近世陶器		
小倉殿館跡	城館	中世	-	越中瀬戸、肥前陶器		
鷹栖黒河遺跡	散布地	古代・近世	-	須恵器、土製品、越中瀬戸、肥前陶器		
鷹栖神音遺跡	散布地	古代・中世・近世	-	土師器、越中瀬戸		

PL.1 空中写真（1）



この写真是、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものである。（承認番号）平16北版、第101号

PL.2 空中写真（2）



この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものである。（承認番号）平16北極、第101号

PL.3 調査写真 (1)

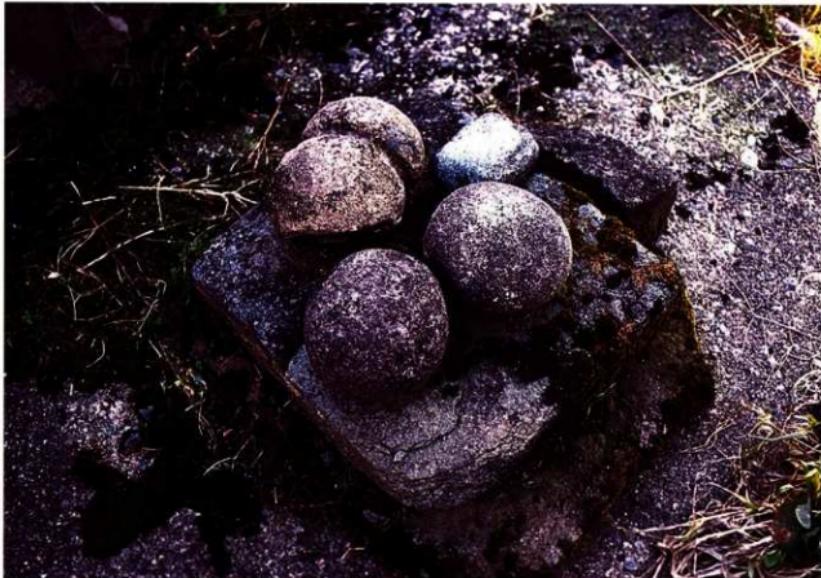


1. 荘高層遺跡 2. 五郎丸遺跡 3. 鹿島遺跡 4. 野村島宮島遺跡  
5. 野村島西島遺跡 6. 桑野神社遺跡 7. 鷹栖四谷遺跡 8. 小倉の土居跡

PL.4 調査写真 (2)



1.不動島道路 2.薦柄宮木道跡 3.小倉殿船跡 4.薦柄黒河道路 5.薦柄神石道跡 6.薦柄宮木道跡の五輪塔 7.小倉の土居跡の石造物(1) 8.小倉の土居跡の石造物(2)



1. 般高屋遺跡の五輪塔 2. 鷹栖地内の五輪塔

PL.6 遺物写真（1）



PL.7 遺物写真（2）



PL.8 遺物写真（3）



PL.9 遺物写真 (4)



PL.10 遺物写真（5）



# DISTRIBUTION SURVEY REPORT OF THE TONAMI CITY Vol.1

—TAKANOSU・HIGASHINOJIRI・GOKAYA—

Copyright © Tonami Prefectural Board of Education  
401 Aoshima Shogawamati Tonami-City Toyama 932-0392 Japan

No parts of this publication may be reproduced or copied by any means  
without prior permission of the copyright owner.



## 砺波市遺跡詳細分布調査報告 1

—鷹栖・東野尻・五鹿屋—

2005年3月31日発行

編集 砧波市教育委員会

〒932-0393 富山県砺波市庄川町青島 401 番地  
TEL (0763) 82-1904 FAX (0763) 82-3521

発行 砧波市教育委員会

印刷 有限会社明和印刷  
〒939-1507 富山県南砺市二日町 2196 番地  
TEL (0763) 22-4881 FAX (0763) 22-4880

Printed in Japan



Fig.12 埋蔵文化財包藏地と遺物採取地点(2004年度) Scale=1/10,000

